

まだ通がず。面容端正し。高き姓の人伉儷ふになほ辞びて年祀を経。爰に有る人伉儷ひて怨々物を送る。彩弔三車なり。見て廬の心をもちて兼ねてまた近き親ぶ。語に隨ひて許可し、闇の裏に交通ぐ。其の夜闇の内に音有りて言はく「痛きかな」といふこと二遍なり。父母聞きて相談ひて曰はく「いまだ効はずして痛むなり」といひて、忍びてなほ寐。明日の曉に起き、家母戸を叩きて驚かし喚べども答へず。怪びて開き見れば、ただし頭と一の指とのみを遺し、自余はみな歟はる。父母見て、悚慄り憫惄て、娉妻に送れる彩弔を曉れば、返りて畜の骨と成る。載せたる三の車は、また返りて吳朱曳木と成る。八方の人聞き、集り臨り見て、怪びずといふこと無し。韓笞に頭を入れ、初七日の朝に、三宝の前に置きて斎食をする。すなはち疑はくは、災の表まづ現れ、彼の歌は是れ表ならむ、と。或るいは神しき怪なりと言ひ、或るいは鬼の啖ふなりと言ふ。覆し思ふに、なほし是れ過去の怨なり。斯れまた奇異しき事なり。

孤の嬢女觀音の銅の像を憑敬ひて奇しき表を示し現
報を得る縁 第三十四

諸樂の右京の殖機寺の辺の里に、一の孤の嬢有り。いまだ嫁はず、夫無し。姓名詳ならず。父母の有ける時には、多く饑にして財富み、數屋と倉とを作り、觀世音菩薩の銅の像一体を鑄奉る。高二尺五寸なり。隔家を仏の殿と成して彼の像を安き、之れを以ちて供養す。聖武天皇の御世に、父母命終り、に繩を繋けて牽き、花と香と燈とを供へ、用ちて福の分を願ひて曰さく「我れはすなはち一子にして、父母無し。孤にしてただし独のみ居る。財を亡ひ家貧しくして身を存つに便無し。願はくは、我れに福を施へ。早く眠へ。急に施へ」とまうす。昼夜哭きて願ふ。里に富める者有り。妻死にて鱗なり。是の嬢を見て媒を通して伉儷ふ。嬢答へて言はく「我れ今貧しき身にして、裸衣にしつゝて被無し。何為れぞ面を障ひて参向でて相語らむ」といふ。媒還りて状を告ぐ。壯聞きて言はく「彼の身貧窮しくして衣服無きことは、我れ明に知る所なり。ただし聽すやいなや」といふ。媒往きて告げ知らす。嬢なほし否辞ぶ。壯強ひて入りて覗る。すなはち心に聽許し、壯と交る。明日終日に雨降りて止まず。雨に障へられて避らず。三日留る。夫の壯飢ゑて言はく「我れ飢う。

汝(汝)も南无(南無)や、仙(仙)と觀音文(觀音文)、さかも酒(酒)持(持ち)、「汝(汝)も」から同音の南无(南無)がみちびかれ、南から仙(仙)と觀音文(觀音文)がみちびかれ、「汝(汝)も」へと連想が展開し、さらに、觀音文が同音を共にする酒(酒)持(持ち)がみちびき出されてゐる。秋迦牟尼を「秋迦文」とする例は、たとえば妙法蓮華經・方便品はじめ諸書にみえ、めずらしいものではない。三五車に乗つて、さらには尼から同音を共にする「溢(溢)」がみちびき出されている。「溢(溢)」は求婚する男の多さをいうのである。三未詳ははじめ諸説は天理市庵治(天理)町とする。中世には城(城)郡山辺(山辺)の郡、などの所属とされる。十市郡となるのは誤りか。三城下郡に鏡作郷がある。この地にかかる一族である。三未詳。本説話以外に所伝をみない。日本古代人名辭典は「鏡作造刀」という項目をたてるが、「万葉字」といふのが女子の名。類の名は未詳。

一染色された絹布。二もとの状態にもどる意の「返」が用いられていて、ことにより、彩弔、三車、が本来は畜骨、吳朱曳木、であったことが示される。三畜骨が彩弔に変じていたことにより、彩弔が巻絹の形態であったことが推測されよう。四ゴシユ。ミカン科。「吳朱曳木草云、吳朱曳、吳朱二音、加波(加波)、之加美(之加美)〔和名抄〕。藥用絹の遺体あるいは遺体の一部分、あるいは遺骨)を笠に納めて仏前に安置することが追善の儀式の一部としておこなわれたか。→中卷三縁。

第三十四縁 あやしき表(表)の説話。善業についての現象説話。今昔物語集・十六ノ八に書承。
三奈良県大和郡市植根町に所在した寺。三一尺は、唐大尺では約一九・六七×一・高麗尺では三五七×一余。四別棟として建てられた家をいうか。今昔・五ノ一に露々細々造タリとみえる「露」と同じであろう。三分散する。後代の説話においても、女が神仏に祈願するはあいには、夫を得ようと祈願した、とはあきらかにされないことが多い。

八妻の無い男。五ノ一中卷十六縁。

云どうしてなのか、面を覆つてあなたと対話し語るなんて、不可能だ、と言ふのである。面を覆う袖が無い(衣服が無い)、と言つて、求婚を拒否。三本説話では衣服に関して言及さ

「飯を賜へ」といふ。妻言はく「今進らむ」といふ。竈に燃火を起して、空しき匂を居る、頬を押して蹲る。空しき屋に入りて徘徊りて大に嗟き、口を嗽き手を洒ひ、堂の内に参入りて像に繋けたる縄を引き、涕泣きて白して言さく「恥を受けしむることなれ。我れに急に財を施へ」とまうす。罷り出でて、先の如く空しき竈戸に向ひて頬を押して蹲る。爰に日の申時に急に門を叩いて人を喚ぶ。出でて見れば、隣の富める家の乳母有り。大櫃に百の味の飲食を具納れ、美き味芬馥しく、具らぬ物無くして、器はみな碗と碟子となり。すなはち与へて言はく「客人有りと聞く。故に隣の大なる家具けて物を進納る。ただし器は後に給へ」といふ。嬢大に歓喜び、幸の心に勝へず、著たる黒き衣を脱ぎて使に与へて言はく「物の献るべき無し。ただし垢つけるなり。すなはち与へて言はく「物の獻るべき無し。ただし垢つける衣のみ有り。幸はくは受け用よ」といふ。使の母取りて著、急々に還り去ぬ。食を以ちて夫に齎すれば、食を見て怪び、彼の食を見ずしてなほ妻の面を瞻る。明日夫去ぬ。絹十疋と米十俵とを以ちて、妻に送りて言はく「絹は廐に衣被に縫ひ、米は急に酒に作れ」といふ。娘彼の富める家に往きて幸の心を述べて慶び貴ぶ。隣の家室曰はく「癡なる娘子かな。もし鬼託くや。我れは知らず」といふ。彼の使なほ言はく「我れまた知らず」といふ。嘖められて家に帰り、常の如く礼まむとして堂に入りて見れば、使に著せたる黒き衣、銅の像に被る。爾うしてすなはち觀音の示す所なりと知る。因りて因果を信ひ、ますます慇懃に彼の像を恭敬ふ。此れより以来、本の大なる富を得、飢を脱れて愁無し。夫妻天になること無く、命を全く身を存つ。斯れ奇異しき事なり。

法師を打ちて現に悪しき病を得て死ぬる縁 第三十五

宇遲王は、天骨邪見にして三宝を信はず。聖武天皇の御世に、是の王縁ありて山背に徘徊る。八人從ひて奈良京に向ふ。時に下毛野寺の沙門諦鏡奈良京より山背に往き、經喜郡を歩く。師率に王に值ひて避け退く所無く、笠を傾け面を匿して路の側に立つ。彼の王見て、馬を留め刑たしむ。師弟子と水田に入りて逃げ避れ走る。なほ強ひて追ひ打つ。師の負ひ持てる藏、みな撃たれて破れ損はる。時に法師呼びて曰はく「奚ぞ護法無からむ」といふ。王去ること遠からずして、其の路中に儻に重き病を受く。高き声をもちて叫び呻ひ、地を踊離ること二三尺ばかりなり。從者状を知りて法師を勧請ふ。師否びて受けず。三遍請ふれどもなほ終に受けず。問ひて曰はく「病むか」といふ。答へて

第三十五縁 宇遲王の病死を因果の理によつて説明する。天平九年(聖武)九月、從五位下。天平九年十二月に内蔵頭、天平十年(聖武)閏七月に刑部大輔、十二月に中務大輔(続紀)。

三 未詳。鶴岡良弼は、城上郡下野郷の竹林寺を擬している。竹林寺は奈良県桜井市大字笠に所在。一名笠寺。(笠にかかる単位の名前である。)笠寺を擬することの正しさを予想させるが、「奈良京下毛野寺」(中巻三十六縁)には合致しない。三 未詳。本説話以外の所伝をみない。

三 京都府八幡市、城陽市、經喜郡のあたり。三令集解・僧尼令には、道路で僧尼が俗人に出会つたばあいの規定がみえる。騎乗の僧尼が三位以上の者に出会つたならば僧尼は身を隠さなければならぬ。身を隠す場所が無いばあいには馬を止め路側に立たなければならぬ。騎乗の僧尼が五位以上の方に出会つたならば僧尼は馬を止め道側に立たなければならぬ。僧尼が歩行のばあいには僧尼は身を隠さなければならぬ。僧尼が歩行のばあいの、身を隠す場所が無いばあいの規定は判然としない。

れることが多い。説話展開のうえでの伏線となつてゐる。三たわむれる。三男は雨に妨げられて帰ることができない。

一本説話では、男が「夫」と表現される時に女も「妻」と表現される。二底本文に「廐」、国会図書館本訓釈に「廐余倍乎」とある。しかし、「廐」も「なべ」も、水を加えて熱して煮炊きするための器であり、蒸すための器ではない。蒸すための器は「醤」とである。「廐」は「醤の異体字「醤」の誤写。當時、飯は米を蒸してつくりた。「餌」(音勝、古之岐)、«糀」(音勝)、豆也(利名抄)、糀杖をついて、頬を手で支えるのが「頬杖」、あとを手で支えるのが「つら杖」。四 原文「繋」像引「繩」。六 観音に一度祈願してからは、この公は泣かなない。ひたすら待つ。観音の救済を確信した姿が描かれる。七午後三時から五時のころ、「乳母」が登場している。本説話のばあい、乳母であることの意味があきらかではない。観音が乳母に身を変じていたとされるのは、観音を女性と考えたから。観音を美女として崇拝する傾向のだから、供物は主人公のさきげたものではない。父母のさきげたものであろう。上文には、「安^{アシ}彼^ヒ以^シ之^シ供養^{コウヤウ}」とある。中巻十四縁。このようないい記述があるのはめずらしい。上文にみえるように、器は碗と碟子とであった。貴重品であろう。本説話では叙述を欠くが、器七若死にすることなく。